

平成22年度 「高等学校教科指導パワーアップ事業」(総合的な学習の時間) 中間報告

1 事業の趣旨

基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うため、指導方法の研究や教材開発等を通じて、教科等の指導力の向上を図り、更には、成果を共有することにより、県全体の指導力向上に資する。

2 事業内容

(1) 研究指定期間

2年間

(2) 研究校の取組

- ① 新学習指導要領の円滑な実施に向けた研究
- ② 公開授業・研究協議の実施
- ③ パワーアップのための研修の実施

3 本校の取組(実施内容)

(1) 目的

自己の在り方生き方を考えることができる「セルフプランニングタイム」(本校における「総合的な学習の時間」の名称)におけるプログラムの開発

(2) 具体的な取組

① 「総合的な学習の時間」全体計画の作成

学校の教育目標「鍛錬 節度 創造」をもとに「総合的な学習の時間」の全体計画を作成

② 各年次での取り組み

ア 1年次生

- ・校外研修(平成22年11月12日)
- ・芳泉ゼミ1
- ・「情報A」の授業と連動し、情報Aの授業の中で芳泉ゼミで発表するためのプレゼンテーション資料(パワーポイント)を作成した。他教科と有機的に連動することで、「総合的な学習の時間」に対する生徒の意欲も上昇した。
- ・全体発表会(平成23年2月3日)
指導助言 岡山大学大学院教育学研究科 住野 好久 先生(コンサルタント)
岡山県教育庁指導課 豊田 晃敏 先生, 上野 修嗣 先生
- ・芳泉ゼミ1のまとめ冊子作成

イ 2年次生

- ・修学旅行で大学や企業を訪問しレポートを作成。蒼碑祭文化の部で展示による発表
- ・出張講義(平成22年11月12日)
- ・芳泉ゼミ2
- ・全体発表会(平成22年12月16日)
県内の高等学校の先生に一般公開
指導助言 岡山大学大学院教育学研究科 住野 好久 先生(コンサルタント)
岡山県教育庁指導課 豊田 晃敏 先生
- ・ディベート選手権(平成23年2月17日)
各クラスの代表によるディベート大会
- ・一年間の反省(平成23年2月21日)
ルーブリック自己評価を実施

③ 教員の取り組み

ア 教員校内研修（平成22年10月5日 本校大会議室）

講演「伝える想い 伝える技術」

講師：エヌティ・クリエイト チーフプランナー 筒井 徹也 先生

イ 学校訪問、公開授業参加

- ・平成22年度高等学校教科指導パワーアップ事業「教科指導パワーアップ推進フォーラム」（平成22年5月13日）
- ・学力向上研究フォーラム 学力をつける総合的な学習の時間の取り組み（平成22年7月9日）
- ・平成22年度高等学校教科指導パワーアップ事業（総合的な学習の時間）先進校訪問
平成22年10月8日 福岡県立伝習館高等学校
平成22年10月8日 高知県立高知追手前高等学校
- ・平成22年度高等学校教科指導パワーアップ事業（総合的な学習の時間）公開授業参加
平成22年12月1日 岡山県立津山東高等学校
平成23年2月14日 岡山県立落合高等学校

④ 公開授業・研究協議

ア 公開授業

日時 平成22年12月16日 7時間目

場所 岡山県立岡山芳泉高等学校体育館

内容 「芳泉ゼミ2」全体発表会

対象 2年次生

参加者 県内高等学校教員（25名）、コンサルタント（住野教授）、指導課（豊田先生）

目標 AO、推薦入試で問われているテーマまたは大学の研究室で行われている研究に関するテーマの中から1つ選び、そのことについて深く研究し、レポートを作成し、発表する。本時は研究したことをわかりやすく発表することを目標とした。



イ 研究協議

- ・参加者からの主な意見・感想・質疑
- ・テーマ設定が難しいが、入試問題をテーマにしているのは面白い。
- ・発表する力が総学を通して身についたと感じるか。
→全体発表会は各ゼミの代表者であるが、各ゼミ内では全員が発表を行っており、発表する力が増していると感じる。
- ・指導助言 岡山大学大学院教育学研究科 教授 住野 好久 先生
 - ・考えること、探究すること、ディスカッションすること、ともに学ぶことが好きな生徒を育てなければならない。そのためには、楽しく主体的に学ぶプロセスが大切である。
 - ・特色ある学校づくりと特色ある総学づくりが大切である。
 - ・教科、領域等の指導と総学の関連性を意識することが大切。
 - ・社会に触れる時間にする。
- ・まとめ 岡山県教育庁指導課 指導主事 豊田 晃敏 先生
 - ・社会が高度化、複雑化している現在、生徒自ら他者との関わりの中で課題を解決する力を身につけなければならない。それを探究活動の中で身につけてゆかせるものが総学である。
 - ・どのような観点で評価すればよいかを研究しなければならない。たとえば、調べたことを上手に発表することを評価するより、探究活動が見える発表を評価するべきではないか。

4 取組の成果

(1) 1年次

① 進路ノートの活用

前期で行った「自分を知る」、「職業研究」、「学部・学科研究」などのさまざまなテーマに関する活動は、主にベネッセコーポレーションの進路サポート「進路ノート」1年生用を活用した。全ての項目に記入する時間的余裕はなく、多くの部分を残す結果となったが、生徒が自分について考える良いきっかけとなった。

② 校外研修

午前の訪問先である岡山大学から訪問人数の指定があったので、全員が第1希望の学部には訪問できなかったわけではないが、概ね満足していたようである。多くの生徒がレポートの中で自分の進路について考える材料となったと報告している。また、午後の各事業所訪問では、単なる見学ではなく、大学の学部・学科で学ぶこととの絡みを意識して研修にのぞめた生徒もいた。行き先の選定は過去の訪問歴から教員が選んだが、訪問希望アンケートをとるなどして、生徒の意見を反映させてもよかったかもしれない。

③ 芳泉ゼミ

全てのグループが発表時にパワーポイントを利用したプレゼンテーションができた。これは、情報Aの授業との連携でプレゼンテーション用の資料作成ができたのが大きな要因である。授業の進度に合わせて、発表までのスケジュールを年度当初のものから変更し、その結果ゼミの回数を増やすことができ、また、セルフの時間はグループ内で持ち寄った資料をもとに考察したり、新たな課題を発見したりする時間に充てることができた。充実した内容の研究を行ったグループがある一方で、時間を有効利用できなかったグループもいくつかあったのが残念であるが、発表会等で素晴らしい研究をしたグループから刺激を受け、次に行われる芳泉ゼミ2の予行演習としては良い経験になったのではないだろうか。来年度はさらなる内容の充実が望まれる。

④ 全体を通して

さまざまな活動が自分を知り、将来について考える良いきっかけになったのではないだろうか。主体的に取り組むほど内容の濃い活動になるのであるが、その部分を生徒まかせにしてしまった。教員、生徒ともにさらなる意識の向上が求められる。そのためにどのような取り組みができるのかを早急に検討する必要がある。

(2) 2年次

① はじめに

昨年度末にはアンケート方式で以下の点について、生徒一人ひとりが1年次の一年間の活動を振り返った。自分が特に有意義と感じた活動とその理由、活動を通して上達したところ、改善すべき点と改善策、これからしたいこととその理由。以上の結果を踏まえて本年度2年次での年間指導計画と到達目標を設定した。年度当初にセルフプランニング通信を通して、年間指導計画と活動に対する到達目標の一覧表を示した。またそれぞれの活動毎にも通信を通して、目的や目標を提示してきた。本年度は評価をどのように行うかという点について考えていく中でルーブリックを活用した評価を試行してみるに至った。

② 本校の総合的な学習におけるルーブリックを活用した評価の目指すところ

ア 得点結果の高低といったプロダクト評価ではなく、生徒が自らの学習の過程や成果に見られる良さなり、強み、可能性等に気づき、その後の学習の展開に必要な調整を加え、豊かな自己実現に役立つような評価を目指す。

イ 教育目標を追求する上で、その追求途上の各時点において、目標とその時点における状態とを比較して追求活動の調整のために必要な判断をすることを可能にする。

ウ 個人内評価を文章記述する際も、生徒の良い点や進歩の状況を数値化した評価結果の記録をもとに文章化し、より客観的な評価が表現できるようにする。

③ 生徒の自己評価「1年間のセルフプランニングを振り返る」集計結果

全体では59%の生徒が「セルフプランニングの活動を通して、主体的に調べたり、考えたりする中で自分の将来について考えることがあった。」と答えており、31%が「将来については考えなかったが、セルフプランニングの活動を通して、主体的に調べたり、考えたりした。」と答えているので、本校のセルフプランニングのねらいをほぼ達成できたのではないかと考える。個々の活動については「修学旅行の自主研修の計画立案」「出張講義」「芳泉ゼミ2のレポート作成」「ディベート作戦会議」「ディベート審査員」において積極的な取り組みが伺える。情報を得たり、自分で考えて企画したり、判断したしたりする内容であり、今後も充実させるべき活動ではないかと考える。また、「学部・学科研究の発表」「芳泉ゼミ2の個人研究」「芳泉ゼミ2の発表」「ディベーター」においては積極的に取り組んだ生徒の割合が低い。いわゆる人前で発表する活動において達成度が不十分な生徒が多いことになるので、今後は発表という活動について内容や方法を検討する必要があると考える。

④ まとめ

ループリックを活用した評価は本年度は年度途中からの研究であり、本来それぞれの活動の各時点で行うべき評価ができなかった。年度末にまとめて行ったが、最初に大まかな到達目標を示すだけでなく、到達目標の細目をそのつど示し、自己評価させれば、自分はどこまでできているか、何が足りないか、今後は何をどのようにすべきか、についてもっと考えさせることができればよかったと考える。また、各クラス担任が総合的な学習の評価を行う際、各生徒が行った自己評価を参考にし、より現実に即した評価をすることが可能であったと考える。

5 今後の課題

(1) テーマの設定

適切なテーマ設定を行うための導入方法

(2) 評価の方法

ループリック評価の充実

(3) 年間の流れを小冊子にする

総合的な学習の時間の指導のためのマニュアル化